

「迷信から化学へ」

・病気で見る日本史」

日時…平成二十八年三月一日

(火)

順天堂大学医学部医史学研究室

特任教授 酒井 シズ

1. 日本古来の医術（医術の歴史）とは

古墳時代・韓から医術が伝来した。古来の医術は「大同類聚方」(808年)に記録がのこっている。

2. 江戸時代の治療と病気

・江戸時代の治療には、漢方・鍼・灸や按摩（日常的 家庭内治療）、湯治（温泉療法）等がある。
・江戸時代で、一番深刻な症状は梅毒である。梅毒は1490年代に新大陸から旧大陸へ伝わった。

た。1500年代初頭に日本で発生

し、江戸時代に梅毒が蔓延した。

梅毒は「花柳病」と呼ばれた。

梅毒は1910年に治療薬（サルバルサン）が開発され、被害が減少した。被害が大幅に減少したのは、1928年にペニシリンが開発されたことに伴うものである。

・江戸時代では、麻疹や疱瘡が流行した。麻疹の症状を軽くする方法として診察や麻疹の病神退治のまじないなどがなされていた。

・現在まで続いている江戸の病名としては、卒中、痔、眼病、皮膚病、虫歯、狂犬病、麻疹、コレラ、疱瘡、梅毒、肺病等がある。

・江戸の病名と現在の病名で違うものがある。

①病原体の発見で現代病名がついたもの↓肺結核（江戸時代は労咳）

②病因が明白なもの↓食中毒

（江戸時代は食傷）

③現代医学による新しい病↓

鬱病、総合失調症（江戸時代は鬱気）

・江戸の病名の内、現代の日常生活に生きているものがある。

↓癩にさわる、癩癩もち、鬼の霍乱

・江戸時代における西洋医学の導入の歴史は、江戸初期までさかのぼる。長崎でオランダとの交流がはじまりである。江戸中期では、西洋医学書の輸入がなされ、「解体新書」の翻訳等がなされた。解体新書の翻訳は、今後の医学が発展したことはもちろんであるが、オランダ語の理解の下地になった。

以上